

**明** 石博高と初代島津源蔵(一八三九〜一八九四(以下「初代源蔵」と略記))の交流を物語る記述は散見されるが、実はそれを裏付ける資料は乏しい。島津製作所の収蔵資料の中で、明石の名前が出てくるのは、初代源蔵が、明治十九年(一八八六)に発刊した『理化学的工芸雑誌』のみである。その創刊号に「農業土性弁」と題する明石の論考が掲載されているが、この内容からは初代源蔵との関係性を見出すのは難しい。

しかし、この企画展の開催にあたり調査したところ、明石の伝記である『明治文化と明石博高翁』に、初代源蔵の息子である二代目源蔵(一八六九〜一九五〇)が序文を寄せていることを見つけた。その記述から明石と島津父子の関係性の一端を知ることができる。まずはその序文の一部を以下に引用したい。

私の先考源蔵は、親しく先生の御教を受けた一人でありまして、先生よりすれば不肖は、その孫弟子に当るわけであり、少年の頃父の命を受けて、しばしば先生の許を訪れた時のお姿がいまもはっきりと記憶に残っているのであります。この縁故をもちまして、此度本書に一文を序する光栄を与えられましたことは真に欣幸の至りでありまして、有志諸賢の御努力を深く感謝すると共に、親愛なるわが市民諸君に、先生の遺徳の広く顕彰せられんことを、熱望してやまないであります。

この内容から、初代源蔵が明石から教えを受けていたことや、二代目源蔵とも面識があったことが明らかである。また、伝記の発行者である明石博高翁顕彰会のメンバーの多くは稲畑勝太郎など織物業関係者である中、二代目源蔵が会の顧問を務め、序文の寄稿者に選ばれているということは、明石と初代源蔵が特別な関係であったことをうかがわせる。

明石と初代源蔵の関係を推測できる資料として、明治一〇年(一八七七)に東京上野で開催された第一回内国勸業博覧会と明治四十年(一八八〇)の第二回内国勸業博覧会への出陳の記述がある。初代源蔵が第一回内国勸業博覧会に出陳した品は、「錫製ブリー」(医療器具の一種を指す)であった。京都における医療器具の生

## 創業のころ

仏具職人から理化学器械の製作へ

川勝美早子

産は古く、療病院では京都市と呼ばれる医療用具が作られた。西洋のものを模範としながら、それぞれの医師によって工夫、改良が加えられ、当時の板金業者や鋳物師などに製造・加工が委託されていた。博覧会の審査評語には、「織田卯一郎出品工人島津源蔵」とあり、実際に製作したのは初代源蔵であるものの、出品の名義人は織田卯一郎であった。織田は、明石が創設した煉真舎や療病院に資金援助を行うだけでなく、共同で勸業計画を立ち上げるなどし、明石との関係が深かった。すると、織田は明石から初代源蔵を紹介、推薦され「ブリー」の製作を依頼した可能性が高い。つまり初代源蔵は、明石とのつながりの中で博覧会に出陳する機会を得たといえよう。

ついで第二回内国勸業博覧会では、理化学器械を出陳し、「蒸留器」で有功二等賞牌を受けている。これは、初代源蔵が理化学器械を製作していたことを示す最初の記録でもある。その報告書には、「父清兵衛鋳物ヲ業トス是ヲ以テ源蔵幼ヨリ其法ヲ学フ明治八年蘭人「ヘルツ」京都三至リ司業場ニ従事ス源蔵因テ冶金術ヲ学ビ理化学器械ヲ摸製ス」と記されており、家業の鋳物業を受け継いだ初代源蔵が、京都舎密局内でヘルツ(Anton Johannes Cornelis Geurts)から冶金技術を学ぶことによって理化学器械の複製をはじめたことが確認できる。

当時、舎密局内には試験室・書籍室・器械室・玻璃製造所・薬物製錬室、楼上には製品陳列室・舎密学教室が設けられており、器械室には少なくとも物理器械二八種、化学器械四三種が収蔵されていた。おそらく初代源蔵に輸入品の修理を依頼したのは明石であり、その中で初代源蔵は、器械の素材の大半が、仏具製造で扱った真鍮、鋳鉄、鋼鉄、亜鉛、錫であることを知り、鋳物技術の新たな用途を理化学器械製造に見出したと考えられる。こうしてみると、明石が島津製作所の創業に大きな影響を与えていたといえよう。

参考文献

田中緑紅『明治文化と明石博高翁』(明石博高翁顕彰会 一九四二)

